

# 歴史

# 探訪

「うつくしま」への系譜



本州最大の炭鉱として、国家の基幹産業を担ってきた常磐炭礦（現・常磐興産）は、昭和30年代からの「石炭から石油へ」という社会的なエネルギー革命に伴い、存続の危機を迎えました。その起死回生の策として「日本のハワイ」をいわき市に造ろうという、画期的なアイデアが生み出され、昭和41年（1966）に開業したのが常磐ハワイアンセンターでした。ここでは、開業当時を知る常磐興産（株）企画部長の坂本征夫さんにお話を伺いながら、地域社会をも救った、人々の新たな挑戦の軌跡を追いかけてみました。

## 厄介者の温泉を新たな観光に

かつては、「黒いダイヤ」と呼ばれた石炭。その炭鉱業が斜陽産業となって久しい頃、常磐炭礦も厳しい経営に追い込まれていました。しかも常磐北部炭田は、掘り進むほどに高熱とガスと温泉が噴き出す「三重苦」を抱え、温泉をくみ上げるだけで年間2億円の費用がかかるなど、その対策費は経営を圧迫していました。この逆境に、当時の副社長、のちに社長、会長となった中村豊（1903～1988）は、驚くべき逆転の発想で、負の財産をプラスに

## 逆転の発想と新たな挑戦

# 苦難を夢に変えた

# ハワイアンセンター



自然のビーチを演出したステージで、フラダンスを踊る一期生のダンサー。当時は全員が、炭鉱従業員の娘たちでした。



オープンのわずか2カ月前。ここから驚異的な追い込み作業で、オープンの日を迎えます



中央に柱がない工法でドームが建設され、当時としては画期的な、巨大な室内スペースが生み出されました



いわき市

転化させようと、まったくこれまで縁のなかった分野への進出を図りました。それは、「あり余る温泉を利用した観光事業でした」。「中村は、行動力や構想力、そして決断力をすべて兼ね備えた人でした」と、坂本さんは語ります。強烈な危機意識のもと、世界各地の視察に出発した中村は、アメリカ、ヨーロッパなどの炭鉱地や観光地を回り、ハワイ、タヒチにも立ち寄りました。ここで中村はひらめきます。温泉の熱さと、暑い夏。これを結びつけ、「日本のハワイ」を造ることは出来ないか。そして彼は、昭和39年に、温泉と熱帯樹とフラダンスを売り物にした、インドア施設の構想を発表しました。それは、日本初のテーマパークの創造でした。まったく前例のない新たな挑戦です。この時、炭鉱の人々が一丸となった取り組みがスタートしました。その精神的な柱となったのが、「一山一家」です。一つの山（炭鉱）を掘るのに、全員が一丸となって団結する、「一山一家」の精神のもと、従業員や踊り子、バンドメンバーに至るまでが、炭鉱を退職した従業員やその家族で固められました。畑違いの仕事を一日でも早く身につけようと懸命に準備を進め、ついに昭和41年1月、常磐ハワイアンセンターはオープンしたのです。



ヤシの木を植える作業員たち。一致団結の炭鉱パワーで「東北には育たない」と言われたヤシの木を根付かせ、ハワイの演出に大きな力を発揮しました

## 一山一家の結束力で夢を実現

「このオープンのタイミングは絶妙でした」と坂本さんは語ります。折しも一億総レジャー化の時代。日本人のだれもが、新たなレジャー施設を待ち望んでいたこの時期、ハワイアンセンターの誕生は、一般大衆に広く受け入れられ、開業から8年で入場者が1000万人突破と、一気に人気を博しました。その大きな理由は、施設の独自性と、何でも自分たちで考え、形にしていこうというバイタリティにありました。「熱帯樹には北限があり、この地には根付かない」と周囲から伝えられると、中村はむしろ喜びました。常識で考えればできないというのなら、それをやってやるつもりじゃないか。そんな意気込みのもと、温泉の熱源を使い、温室の中でヤシの木やバナナなどを根付かせることで、南国の雰囲気を出すことに成功したのです。また、昭和40年には、常磐音楽舞踊学院を設立、フラダンスの踊り子を地元の人の中から自分たちで探し、育て、演じるというスタイルを築いたことも、大きな財産でした。外にある、出来合いのものをそのまま輸入するのではなく、自分たちの力で考え、行動していく中で、新たなものを生み出していこうとする姿勢が、多くの人々に評価されたのです。「常磐文化、常磐人」というような、独特のパワーが、いわきにはあるんですよ」と、坂本さんは胸を張ります。

順調に見えたハワイアンセンターですが、やがて苦難の時期を迎えます。昭和48年ごろの第一次オイルショックが成長にブレーキをかけ、さらに石炭産業に対する国からの助成金の返済時期とも重なり、レジャー産業の生命线である、施設の増改築を、控えなければならなかったのです。しかしこの時、強い危



大盛況となったオープン当日。従業員も、その喜びを分かち合いました

機意識のもと、全社員が営業マンとなった集客活動を行いました。さらに「お金がないなら知恵を出そう」と、集客イベントを次々と企画して大量誘客を実現。「一山一家」の精神が、再び強いエネルギーとなって燃え上がり、厳しい状況を乗り切ったのです。

## 地域との共存から豊かな未来へ

逆境を大きな夢に変え、新たなものに挑戦し続ける。その原動力となったのは、企業存続への危機感だけではなく、地域社会を守り、地域とともに共存していこうという使命感でした。ハワイアンセンター建設の話が



一期生のダンサーと中村豊(右から2番目)。中村の卓越したリーダーシップが、大きな成功をもたらしました

持ち上がったころ、自分たちの客をとられるのではないかと、いわき湯本温泉街からの大きな反発がありました。しかし中村は温泉街の旅館を一軒ずつ説得し、オープン後には宿泊客に湯本温泉の旅館を紹介し続けるなどの努力を続けました。また施設には地元以外の業者を絶対に入れないという信念を貫くなど、「地域第一」の姿勢は、多くの市民の共感を呼び、ハワイアンセンターを応援する市民の心は、いわき市30万人の営業マンを誕生させたといっても過言ではないでしょう。

平成2年(1990)、ハワイアンセンターは、全国ブランドとして浸透していた名称をあえて捨て、「スパリゾートハワイアンズ」に



スパリゾートハワイアンズの敷地内に建つ、中村豊翁の像。地域のいまを豊かな未来を具するかのように行んでいます



坂本さんは「常に新しいものに挑戦する精神は、これからも受け継いでいかなければなりません」と語ります

変更しました。これは非常に勇気のいる決断でした。しかし時代のニーズを的確にとらえ、ハワイというコンセプトにプラスアルファの魅力を加えた温泉テーマパークへと飛躍するためには、必要不可欠な英断でした。ここにも中村の「過去を捨て去り、新しいものに挑戦する」精神が、脈々と息づいていたのです。

地域とともに生きていくために、地域の財産をどう生かしていくかを自分たちで考え抜く。常に自ら行動しながら、郷土の魅力を地域社会とともに磨き上げ、全国へと広げていくバイタリティ。それはどんな時代も、豊かなふるさと、豊かな未来への原動力であり続けるに違いありません。